

《高野展記録》文学博士・高野辰之の人柄と学風について

芳賀 綏
(東京工業大学名誉教授)

文学博士・高野辰之という人の人柄なのですが、この人はいわゆる青白い学者とは正反対で、皆さん写真でご想像がつくと思いますが、ずんぐりした体形の赤ら顔の、エネルギーが溢れ出るような人だった。豪放磊落、闊達な性分のエネルギーが溢れ出るような人だった。酒豪でした。これはもう、付き合った人みんなが印象に残っています。親分肌な人柄で人から慕われたんですね。ですから来客の絶え間がなかった、教え子をはじめ色んな知人・友人が、高野辰之を慕ったり頼ったりしたということが多く話に残っております。

大学の講義ですが、東大で日本演劇史を講じ、東京芸大、当時は東京音楽学校と言いましたが、そこで日本歌謡史を講義しました。教室では非常に学生が喜んで、東大の講義なんかは大人気で教室に入りきらないという活況を呈したそうです。それは教壇の上で辰之はなかなか講義が上手、且つ役者。演劇史ですから俳優の名前が出てくるんですけど、俳優の声色を使ったりですね、内容緻密、厳格な学問を講じながら。学生は大喜びだったようです。

そんな風に語る心を持った人で、語りの呼吸が上手かった。昭和

天皇に日本歌謡史をご進講した際も、昭和天皇がカラカラとお笑いになる場面があったそうですから、生き生きと語る心を常に発露させたんですね。要するに内にこもらない学者だった。発散する、人にコミュニケーションしていく。

豪快な反面、繊細さがあつて涙もろい人であつた。それが唱歌を作った作詞の心にも通じたと思うんですよ私は。で、家族を愛した、学生を可愛がった、万人を愛した、無限の愛情の持主で、ことに孫なんかにはただ甘い一方(笑)。という、それぐらい愛情の深い細やかな人だった。

研究の貴重な資料をですね、あちこちの本屋でやっと見つけて買わうわけですが、書店のご主人たちを料亭に招いて「あんた方が売ってくれたお陰で自分の学問が出来たんだよ」と言つて「今日はお礼だ」と言つて「存分に飲んでくれたまえ」という宴会をしたというんですね、もう書店の主たちは「こんな学者はほかにはいなかった」と感激していたそうです。

高野辰之夫人・つる枝という人がまたなかなかの人物で、豪快

な、太っ腹な、まあスケールの大きい夫人だったんですね。

偏った証言の取材に基づいて辰之像を誤り伝えた一部の書物やドラマには、高野つる枝は家計が苦しいなんて言うともソメソ泣いたというような描写があるんですが、これは正反対ですね、もし辰之が何かで落ちこんでいるようなことがあれば、つる枝は叱咤激励したというような、そういう男勝りな女傑であった。こういう夫婦像も、高野辰之、人間・辰之の一面として私は正確に伝えていくことが良いと思っています。

さて、そういう高野辰之の人間味を抜きにしては彼の学問も、作詞された作品も語り得ない、本当には理解できない。たとえば「故郷」にしても、そういった数々の唱歌、それから専修大学をはじめとする100校にも及ぶ学校の校歌、それも。また国文学者としての膨大な学問的業績も、私は同じ源から生まれ出たと思っっているんです。確信を持っております。

芸能史にしても文学史にしても前人未踏の分野を開拓したんですが、明治・大正・昭和三代かけて。日本歌謡史を大成させて学位を得、また帝国学士院賞を受けました。その学風は、第一に非常に手堅い。手堅く証拠を積み重ねていく実証的な学問であったということ。第二に、それをですね、壮大な視野で大きな構想の基にその証拠を活かしていった。だから全体の流れがよく掴める学問。第三に、それを生き生きと、時には華麗に話したし、また文章化した。そうやって民族の心の歴史を一大パノラマとして描き上げてみせて

くれた。『日本歌謡史』、『江戸文学史』三巻、『日本演劇史』三巻が三天代表作と一般に言われています。

ことに私はね、これは重視すべきところだと思ってるんですけど、貴賤の別なく、身分の尊い低いという別なく日本人の足跡を、心をあとづけようとしている。民俗学という常民ですね、常民に眼を注いだ。そして、日本人と外国人の分け隔てがなかった。こういうところにも、この人の人間性が表れていると思います。

で、高野正巳。専修大学の教授もしておりました。この息子の高野正巳はですね、跡を継いで近松門左衛門を中心ですが、辰之が開拓した分野をさらにあとづけて文芸面を掘り下げた。近松門左衛門の研究で学位を取っておりますが、学位を取りながら一方でこの人は柔道六段だったんですよ高野正巳って人はね(笑)。で、そういう文武両道に渡った、まー達人というんですかな、熱心な人だった。研究と並行して創作活動もしています。

高野辰之が民族の先祖からの心を捉えた感性・感受性、そして愛情の眼差し、それがさっき言った三大特色を持った学問を生み出した源であるし、それから唱歌や校歌には、そこに自然と人間を一体として愛する心が表れておりますよね。「故郷」にしても「朧月夜」「春の小川」。皆原点同じです。学問と作詞の原点が同じでありました。

文は人なり、学は人なり、芸術も人なり、と思います。辰之の人間性とすべてこれ表裏一体だったと信じております。